

中国における健常児・障害児に対する排泄指導の実際 — 四川省成都市と日本との比較から —

萩原 はるみ

I はじめに

広大な面積を占める中国。中国は総面積が日本の 26 倍、全ヨーロッパより広く、1 万 5 千キロの国境線で 11 の国々と接している。総人口は 13 億(世界人口の 5 分の 1)を占め、56 もの民族 (94 パーセントが漢民族、6 パーセントが少数民族)を抱える巨大国家である。

その巨大国家は今、高度成長期の真ただ中で世界中の注目を浴びている。そして高度成長の波は産業界のみならず、子育てにおいても大きな影響を及ぼしている。中国の一般家庭では、かつては年寄りが自分の子どもたちのために孫の面倒を見て、育児方法を伝えていく習慣があった。孫の面倒のみならず、共働きの若夫婦の食事まで用意し、子どもや孫たちが膝にまわりつくという意味の「児孫繞膝」とか四世代同居「四世同堂」というのが、老後の理想的なモデルであった¹⁾。従って子育てについても育児書に頼るのではなく、実生活の中で受け継がれてきていたのである。しかし絶え間ない社会の発展の中で老後のスタイル、子育ての方法も変化してきている。都市部では、定年退職後も別の仕事を続ける人や、山歩き、ダンス、旅行、ドライブ、インターネット遊びなどに時間とお金を費やす老人が増えているという。そうした背景の中、ここ数年のうちに多くの育児書が登場してきている。

本稿は変化しつつある子育てのうち、特に排泄について取り上げ、我が国との比較の中で中国における排泄指導の実際を明らかにしようとするものである。さらに、四川省で唯一の障害児教育センターを訪問する機会を得た為、あわせて障害児に対する排泄指導の実際も報告する。

II 中国の教育

人口抑制のため 1979 年からは「一人っ子政策」が導入され、子どもは「小皇帝」「小太陽」と呼

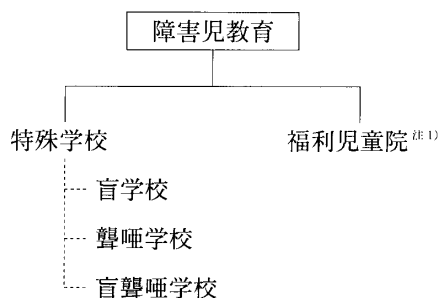
ばれ大切に育てられている。子どもの数が少なく、一人の子どもに惜しまず努力を費やす親が多いため、教育産業も花盛りである。筆者が成都市で夜 9 時半頃散歩していると (中国の一般家庭にはまだ冷暖房設備が充分整っておらず、夏は家にいると暑いと暑いため、涼みに散歩に出かける人が多い)、ある建物の前には自転車がずらりと並んでいた。何か特別な催し物でもあるのだろうかと思っていたら、門から鞆を持った小学校低学年と見られる子どもたちがあふれるように出てきた。塾であった。建物の中はまだ煌々と電気がついており、高学年以上の生徒たちは 11 時近くまで勉強しているという。

わが国においても「受験戦争」という言葉が象徴しているように、大学受験は人生のうちで最も勉強に費やす時間が多い大変な時期である。しかし中国においては小学校から大学に至るまで「重点校」と称する一連の学校があり、大卒者は人口比の 0.1 パーセントにしか満たない²⁾というのであるから、日本よりはるかに狭き門である。北京大学、清華大学を頂点に、天津の南開大学、上海の復旦大学、広東省の中山大学といった名門重点大学の序列があり、見方によれば日本以上の学歴社会といえよう。

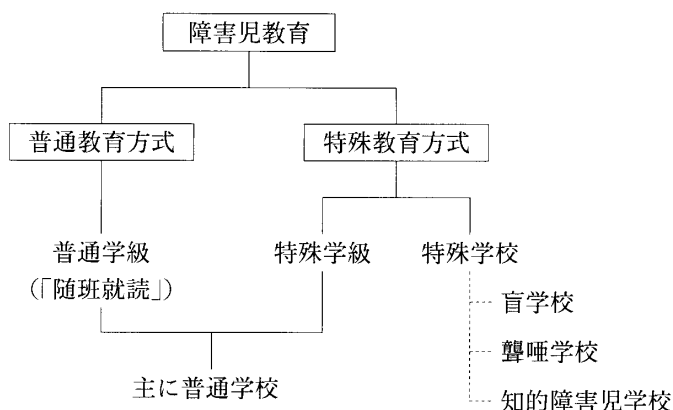
一方で人口の 8 割を占める農村部においては、未だに義務教育すら受けられない子どもたちもいる。都市と農村部との格差は非常に大きい。中国における教育問題・特殊教育についての詳細については別稿に譲るが、本稿では障害児に対する排泄指導についても取り上げる為、特殊教育について簡単に触れておく^{3,4)}。

1949 年中華人民共和国成立以降の障害児教育は、1970 年以前とそれ以降とで大きく変化している (図 1)。成立初期から 1970 年代後半までの 30 年近くは、盲学校および聾学校の整備が中心であった。表 1 はその推移を示しものである。

〈成立初期から 1970 年代後半までの障害児教育〉



〈1980 年代前半からの障害児教育〉



(真殿、2003 より)

図 1 障害児教育の移り変わり

表 1 成立から 1970 年代までの特殊学校・生徒数の推移

年	単位				生徒数計
	特殊学校数	盲学校	聾学校	盲啞学校	
1949	42				2,380
1953	64	13	42	9	5,260
1957	66	7	47	12	7,538
1960	476				16,701
1965	266	25	176	65	22,850
1973	221	9	156	56	24,940
1976	269	9	214	46	28,519
1979	289	9	217	63	約 32,000

(真殿、2003、一部改正)

1949 年の建国当初、全国で特殊学校は 42 校、在籍生徒数 2380 名であったが、1979 年には 289 校、在籍生徒数 32000 名までになった。しかしこの間その他の障害児への教育対応は皆無であったといえる。中国において、障害児教育が本格的に取り組まれるようになったのは、1980 年代になってからである。

1979 年にそれまで特殊教育の対象ではなかった知的障害にも目が向けられるようになった。そして先に図 1 で示したように、1980 年代からは普通学校に付設した特殊学級や、普通学級の中で健常児とともに学ぶ形態の「随班就読」が取り入れられている。「随班就読」は中国語であり、英訳では“learning in regular class”、日本語訳では「統合教育」に近いが、厳密には異なる要素が含まれているようである。中国の特殊教育にお

いて、「随班就読」はその改善に大きく結びついており、国際的なインクルーシブ教育の影響を受けて、新たな方向性を模索しているといわれている。しかし一方で、障害児が普通学級の中でどれだけ十分な教育を受けることが出来ているかという問題も含んでいる。いわゆる「お客さん」状態の問題である。また、重度の障害を持った子どもたちに対しては、充分教育的支援が行き届いているとは言いがたい。

特殊教育は普通教育以上に地域差が大きく、上記のように小学校のレベルから始められているのが一般的である。我が国のような幼児期からの早期教育はまだまだ困難とされている点も付け加えておく。

さて、こうした教育背景をもった中国での子育てはどのようになされているのであろうか。本題

である排泄指導について述べてゆきたい。

Ⅲ 排泄指導の日中比較 — 健常児について

1. 日本における排泄指導

排泄指導をすすめるにあたっては、排尿についての生理学的な知識を押さえておくことが基本である。従ってまず排尿の仕組みについて簡単に触れておく。以下は主に文献^{5,6,7,8,9)}を参考にまとめたものである。

尿は腎臓で作られ、尿管を通過して膀胱に送られる。そして膀胱に尿がある一定量たまると、膀胱内圧が高まり、膀胱壁にある神経が圧を感じる。それが刺激となって「膀胱がいっぱいになった」という情報が脊髄神経を通過して、まず大脳の入り口にある延髄に伝わる。そこで初めて尿意を感じるのである。大脳は「もう少し我慢なさい」とか「トイレを探してそこでしなさい」などの指令を膀胱へ返し、膀胱が「排泄OK」という指令を受けると、膀胱壁が収縮し、括約筋が開いて排尿するという仕組みになっている。

これらの神経は自律神経であり、そのうち尿意を感じるのは交感神経、排尿の指令を出すのが副交感神経である。おしっこをしたいと感じるには、このような神経が発達することが前提である。

① 乳児期

乳児期前半では、大脳皮質がまだ全く整っていないので尿意を感じない。ただ、刺激だけは延髄に伝わるため、膀胱に尿がたまったという刺激を感じるとすぐ排尿する。これを「反射的排尿」といい、生後4～6ヶ月頃まで続く。しかしこの間はおしっこをしたいとか、たまったといった尿意も感じないため、泣くこともしない。

乳児期後半頃から尿意を感じて、それが不快となって泣くようになるが、まだそれがおしっこをしたい感じだとまではわかっていない。

② 幼児期前半

個人差はあるが、早い子では1歳前後で尿意の意識表示をするようになる。泣く、もじもじする、歩き方がおかしいなど子どもの様子で母親は気付くことが多いが、まだ排尿コントロールはうまくできない。排尿コントロールが可能となるのは1歳6ヶ月から2歳くらいであり、この時期が排泄指導に最適の時期といえる。またこのくらいの時

期になると、おしっこの間隔が2、3時間あくようになる。それは膀胱の機能が徐々に整ってきて尿をいっぱいためることができるようになったということである。おしっこの間隔がまだ短い時期に排泄指導を開始してしまうと、1日がトイレ通いの連続で終わってしまう。これでは母子ともに疲れてしまう。筆者も幼児健診や幼児相談の場において実際に「2時間くらい間隔があくようになってからトレーニングを開始しよう」と指導している。

③ 幼児期後半

3歳過ぎると排尿の自覚が可能となり、昼間は大脳皮質の働きによって意識的に排尿できるようになる。これを「随意排尿」という。しかしまだこの時期には、パンツの脱ぎ履きに時間がかかり失敗することもしばしばである。排尿機構が完成するのは4歳過ぎとされている。

以上が排尿の仕組みである。こうした生理学的な仕組みを踏まえ、我が国の排泄指導では以下の点にポイントが置かれている。

先の②でも述べたように、排尿コントロールが可能となるのは1歳6ヶ月から2歳くらいであり、この時期が排泄指導に最適の時期といえる。1歳半の段階で尿意を知らせる子どもはわずかで、おおよそ2歳前後になってようやく知らせるようになる。排泄指導を開始する時期は子どもが排泄を自分でコントロールできるか、精神的に協力できるようになった時期がよいとされている。決して、早期排泄訓練によって排泄を統制するような指導はされていない。

我が国の排泄指導では、個人差を重視し、急がず、焦らず、怒らないことが強調されている。

2. 中国における排泄指導

では中国での排泄指導の実際はどのようなになっているのだろうか。

以下は、四川省成都市^{注2)}最大の書店にて最も販売数の多い育児書¹⁰⁾を取り上げ、排泄の項目の要点をまとめたものである^{注3)}。

① 誕生から6ヶ月～7ヶ月まで

生後2、3ヶ月目から、おむつ交換や排泄指導をさせるタイミングを把握するという目的で、昼間のおしっこの間隔をチェックする。そして日中

2～3回は乳児の足を抱え、「しっ、しっ」と声をかけながら、バケツ（この時期にオマルを購入している家庭は少ない）に向けておしっこをさせる。これを繰り返して訓練すれば、オムツをはずして「しっ、しっ」と声を出すと、膀胱に尿が一杯になっていなくてもおしっこをするようになる。

6ヶ月目からは、オマルに座る訓練を開始する。おしっこの間隔が長ければ、朝目が覚めた時と授乳の後、または2時間ごとにオマルに座らせてみる。そのタイミングが、ちょうど子どもの膀胱が一杯になった時間と合えばスムーズに排尿できる。

大便の回数はおしっこの回数よりかなり少ない。生後3、4ヶ月になると、大便の時間はそれまでより比較的安定してくる。なるべく毎日一定の時間に大便をさせるよう訓練するために、まず子どもの大便の状況を把握する。毎日何時頃するのか、大便前にどんな表現をするのか、例えば他の動作を中止し静かになり、力んで顔が赤くなるなどの表情を観察する。そしてこのようなしぐさをキャッチしたらすぐオマルに連れていき、大便をさせる。それと同時に大人は「うん、うん」という合図を送る。このように時間を決めて排便する訓練を繰り返していれば、そのうち子どもはその時間になったら大便するようになってくる。そして6ヶ月になったらおしっこと同様、オマルに座って大便をする訓練を開始する。オマルはなるべく日当たりのよい所設置する。また大便をさせる時は、必ず大人が傍について見守ってやる。

毎回のおしっこに費やす時間は1～2分、大便は10分ぐらいがよい。あまり時間が長すぎると、子どもは疲れてしまうからである。

② 7ヶ月～8ヶ月まで

母親はこの頃までに子どもの排泄状況をほぼ把握できるようになるので、これ以降の大便訓練はスムーズにいく。排便の時間帯が一定してきており、排便前に力むなどの特有の表情をキャッチしてオマルにすぐに座らせれば、成功率も高くなる。もしタイミングが合って偶然オマルに排便できた場合は、母親は笑顔で「よくできましたね、おまるに座ってうんこができるようになったわよ」と褒めてやり、オマルに座るということは排便を意味するということを子どもに伝える。中にはオマルに座ると、排便せずによく立ってしまうという子

もいるが、あせったり心配したりして無理やりさせないこと。訓練の初期はこのような状況が多い。辛抱強く訓練する必要がある。また排便訓練を嫌がり、泣いて何もできない場合もあるが、あせらず続けてみる。場合によっては訓練計画を少し延長してもよいが、このような訓練は継続していくことが必要である。

おしっこの訓練にはもっと時間がかかる。7～8か月児はおしっこをオムツの中にしてしまうことが多いが、比較的大人しく素直にいうことをきく子どもはオマルに座っておしっこする。また、ほとんどの子どもは食事の前後、または寝る前後におしっこをするようになり、母親はおしっこの規則性を把握すれば、おしっこの訓練は大便と同じように成功する。

③ 8ヶ月～9ヶ月まで

8～9ヶ月になると前月と比べて、オマルを使える子どもは多くなってくるが、排泄自立まではまだ遠い。この頃になると食事も離乳食後期に近づくため、大便の乾燥状況・回数・時間も変わってくる。大便が乾燥状の時は、大便が出るまでに少し時間がかかるため、子どもが力み出してからオマルに乗せるまでの時間は十分ある。オマルに座らせる時間は毎回約5分から10分までとする。座らせる時間が長すぎると、脱肛する恐れがある。回数が多過ぎてもいけない。またオマルに座りながら食べさせたりおもちゃで遊ばせたりしてもいけない。また母親は子どもの大小便の色、固さ、虫がいないかを観察し、子どもの健康状態をしっかり把握することが大切である。

8～9ヶ月の子どもはまだ意識的に排尿コントロールできない。一般的に、座させる時間は水分補給後の10分か15分ぐらいがよい。あるいは目が覚めたら、すぐにオマルに座らせる。

④ 9ヶ月～10ヶ月まで

定時排泄訓練は生後2～3ヶ月から開始するが、意識的に大小便をコントロールできるようになるのは、1歳半以後である。従って9～10ヶ月頃はまだ「反射的排泄」の時期である。しかしこの頃になると条件反射であれ、多くの子どもはひとりでオマルに座って毎日時間通りに排泄するようになる。朝の授乳後排泄する子が多いので、この時間になったら、子どもをオマルに座らせるように

すれば、だんだんスムーズに排泄するようになる。ただし、排泄訓練は絶対に強制してはいけない。子どもを疲れさせないように、毎回座る時間は5分を越えないこと。オマルに座らせながら、遊ばせてもいけない。集中力を分散させ、排泄反射の形成に影響するからである。また母親のなかには、定時排泄訓練は熱心に行うが、子どもに自分でオマルに座らせようとはせず、乳児期の時のように、いつまでも子どもの脚を持つやり方でさせている場合がある。しかしこのやり方では、今後幼稚園に入園してから子どもが困ってしまう。従って排泄訓練のポイントは、定時に排泄させるということと、オマルに座らせる習慣をつけることが大切である。

おしっこについては、9~10ヶ月からオマルに座って訓練させる。時間は毎回3分以内とする。一般的に長期間訓練することにより、昼間はオムツを使わなくて済むようになる。ポイントとしては、夕食後は水分補給を控え、寝る前には必ずトイレへ連れて行く。就寝後は2~3時間毎に子どもをしっかり目覚めさせトイレに連れて行けば夜尿は避けられる。ただし半分寝ている状態で排泄させてはいけない。この状態では排泄訓練の目的を達成できないからである。なかには夜尿を心配し、1~2時間ごとにトイレに連れて行く母親もいるが、このやり方は、逆に子どもの睡眠を妨げ健康に影響し、よい排泄習慣にはならない。

⑤ 10ヶ月~11ヶ月まで

10ヶ月以後には大便はほぼ毎日1~2回になる。母親は排便訓練に本気で取り組むようになるが、なかなかうまくいかず悩む母親も多い。この時期にはまだ意識的に大便できないので、母親による辛抱強い訓練が必要となってくる。毎朝食後には同じ時間に必ずオマルに座らせるようにする。ただし座らせる時間は長過ぎないこと。固めの便の場合子どもは少し力むので、排泄の意思が分かりやすく訓練も順調にすすむ。大便が柔らかめの場合は、大人が分からないうちに排便してしまい、訓練は難しい。排便の意思表示をしない子どもに対しては、朝食後または昼食後にオマルに座らせる習慣をつけていく。

おしっこに関してはこの時期にはまだ自ら知らせることはできないが、子どもをオマルに座らせ

て母親が「しっ、しっ」と排尿を促す声を出すと、間もなくおしっこを排出する。これはある程度「反射的排泄」を形成したという証拠である。一般的に、朝目が覚めた時と昼寝後に成功しやすい。子どもが遊びに夢中になっている時にオマルに座らせても効果はない。泣き叫んで反抗するだけである。また夏の方が冬よりおしっこの訓練はしやすい。その理由の一つとして、夏は股開きパンツを履いているため、オマルに座りやすいからである。夏は汗をかき、おしっこの回数が少なく、失敗の回数も減る。しかし冬は寒いので尿の量も多く、1時間ごとにおしっこに誘わないとオムツを尿でぬらしてしまう。

また毎晩就寝前に排泄させていると、その排泄習慣が形成され、睡眠への影響も減少できる。この訓練によって、一晩中おしっこしなくなる子もいる。勿論、多くの子どもはまだ夜中に1~2回排尿するが、その時間が決まってくるので、その時間になったら起こしてトイレに誘い、排尿の規則性を育成していく。

⑥ 11ヶ月~12ヶ月まで

一般的に、11~12ヶ月ではまだ排泄のコントロール能力は育っていない。親たちは子どもの成長の段階ごとに、毎日の大小便の規則性を観察しながら定時排泄を続けていく。子どもはまだ大小便をコントロールできないが、毎日の訓練で排泄習慣が形成されていく。通常子どもが寝る前、目が覚めた後、授乳前、授乳後、出かける前、そして帰宅後に排泄を誘導する。毎日一定の時間にオマルに座らせ排泄させる。同時に「しっ、しっ」または「うん、うん」の声をかけて、「反射的排泄」を形成していく。

子供の尿量は飲食、季節と緊密な関係がある。春・秋・冬は、夜中の排尿は2回くらいだが、夏は夜間1回起こしてさせるだけでよい。なかには一晩中しない子もいる。また冬はオマルの回りが寒くないように配慮する必要がある。寒いと子どもの排泄意欲を欠いてしまうからである。

大便については、日中の大便時間をしっかり観察して、一定時間内にオマルに座らせる。これを毎日続けて訓練すると、子どもはオマルに座ると大便するようになる。このようにして条件反射を形成していく。毎回座る時間は長くせず、5~10

分までとする。

⑦ 1～2歳

1～2歳になると、中枢神経システムの発達により、少しずつ排泄反射活動のコントロールが可能となってくる。排便回数も日に1～2回に減ってくる。大人がオマルに誘えば、子どもは誘いに従って排便できるようになる。排便できた時は必ず褒めることを繰り返していれば、定期的にオマルに座る習慣がついてくる。オマルではなく床に排便してしまった時は、即座にオマルのところに連れて行って、大便是オマルですということを教える。

おしっこについては、まだ失敗することもあるが、決して叱ってはいけない。叱る回数が増えると緊張感や恐怖感が生じて、逆にズボンを濡らす回数が増えてしまう。

夜尿については回数が減ってくる。ちょっと注意すれば、夜尿は避けられる。寝る前には水分をひかえ、夜中に1度起こして排泄させれば夜尿はなくなる。もし夜尿をしてしまっても決して叱ってはいけない。夜尿は子どものミスではない。

⑧ 2～3歳

2～3歳の幼児の脳機能は比較的成熟してきているため、排泄コントロールが可能となり、自らおしっこを知らせ自分で処理できるようになる。一般的に女児は男児より自立が早い。しかし寝る前や目が覚めた後、出かける前や帰宅後にはやはり声をかけてトイレへ誘う必要がある。男児の中にはあいかわずオマルに座って排泄し、便器の前に立ってすることができない子もいる。しかし親は焦って無理に要求したりしないこと。他児が立ってしているのを見ることによって（観察学習）、いつか自然的に出来るようになる。

大便についても自立に向かう。ほとんどの子どもは起床後あるいは朝食後に排便する習慣が形成されてくる。自ら排便を知らせるようになるが、やはり遊びに夢中になっていると失敗してしまう。従って排便時間になってもまだトイレに行っていない場合は、大人のフォローが必要である。

3. 健常児に対する排泄指導の日中比較

以上、中国育児書の排泄項目を各月齢別に長々と見てきたが、どの月齢においても丁寧に詳しく

指導のポイントが書かれていた。我が国の育児書の記載と似ているという印象をもった。

両国の排泄指導を比較してみると第一に、中国においては、超早期から排泄指導が開始されているといえる。こうした背景の一つとして、社会的な問題が挙げられる。中国では母親も育児をしながら働いているのが一般的である。共稼ぎでなければ生活が成り立たないのである。そのため、子どもには少しでも早く排泄自立をしてもらいたいとの思いは強い。また、最近流行の紙おむつは高価であるため、やはり早くおむつから卒業させたいのである。その他、「排泄訓練には規則性が重要であり、その規則性は最初から備わっているわけではないので、0歳から既に規則性を習慣づけるべきだ」¹¹⁾という考え方も大きく影響している。この時期はまだ自分の意思で排泄をコントロールしているのではなく、条件反射によるものであることを承知の上で訓練を開始している。

しかしそれが条件反射によるものであれ、首も座っていない2～3ヶ月から排泄指導を開始する（写真1）と、7ヶ月頃からはオマルに座らせると排泄できるようになっていることは事実である。実際には生後2～3ヶ月からどころではなく、生後10日目くらいから訓練を開始していると聞いた。しかし、これではたとえが悪いが、筆者には犬に「お手」「お座り」と言われると条件反射でそれに従っているのと同じように思えてならない。文化や社会的背景の違いから来るものであろうか。

日本における排泄指導の基本は、あくまでも子どもの発達に合わせて進めるとされている。教え込むものではなく、レディネス（行動を身につけさせる準備が整った状態）を見定め、子どもが排泄を自分でコントロールできるようになった時期、あるいは精神的に協力

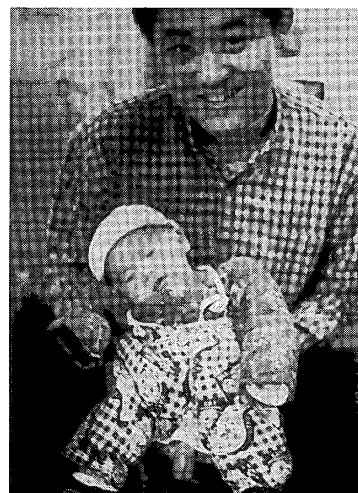


写真1

できるようになった時期に排泄指導を開始する。したがって個人差や反抗期、退行現象などに対しては、おおらかな気持ちで対処していくよう助言されている。

その他、日中間で大きな違いを感じた点は、夜尿についての指導である。わが国においては、夜間寝ている間はおしっこを抑制する抗利尿ホルモンが分泌される為、起こさないというのが原則とされている。しかし中国では、夜間でも排尿の失敗は少ない方が良いという考えからか、排尿間隔にあわせて、寝ている子どもを起こしてトイレへ連れて行くよう指導されている。生理現象を無視した指導といえる。今回採択した育児書は、科学的な育児知識を重視した育児書の一つであると聞いていたが、この点には疑問を感じた。

ともあれ、中国における早期からの指導においても時期こそ早い、我が国同様、子どもの意思を無視した押し付けはいけないとされている。育児書のなかには以下のような注意書きが随所で強調されていた。子どもが安心して排泄できるよう傍で見守ること、子どもの動作にあわせて「しっ、しっ」「ウン、ウン」と声かけをしてやる、排泄訓練は決して強制的に行ってはいけなく、おまるに座らせる時間は長すぎると子どもを疲れさせてしまうのでおしっこは3分～5分以内、大便是5分～10分以内とする、また排泄物をしっかり観察し子どもの健康状態を把握する、おまるは日当たりのよいところに設置するなど、健康面・衛生面・心理面にまで充分気配りされていた点は、我が国と同様であった。さらに、どの月齢においても「失敗しても決して子どもをしかってはいけなく」という注意書きが強調されていた点からも、子どもの気持ちを大切にされた子育ての姿勢がうかがわれた。

こうした超早期の排泄指導がある一方、恒吉¹²⁾によると、「排泄訓練は2歳から2歳半、男の子は3歳くらいで達成するものだ」というようなアドバイスをしている育児書もあると報告されている。激動する中国社会では子育てに対するアドバイスにもばらつきが見られる。中国の育児書には白人の赤ちゃんの写真の掲載が多い。そこには欧米の知識を急速に吸収しながら模索している中国の子育ての姿が反映されているように思われ

た。

4. 中国独特の股開きパンツ

今回中国における排泄指導の実際について取り組んでみようと思うきっかけを作ったのが、この股開きパンツである(写真2)。中国では0歳から2歳くらいの乳幼児は「開裆褲」(カイダングー)といわれる股の部分が開いたパンツを履いている。ズボンもある。このパンツは前からお尻の部分まで開いているので、パンツを脱がなくても、また母親の手を借りなくても、しゃがめばそのまま排泄できる。その点大変便利である。しかも乳児期においては、排泄したという行為そのものが賞賛され、場所はトイレでなくてもかまわないようである。筆者は、道は勿論、スーパーや病院の床におしっこをしている子どもを見た。母親は決して叱らず、排尿できた行為を褒めていた。文化や習慣の違いからであろう。一方、田舎の農村地域では、広場の階段で排尿していた幼児に対して、見知らぬおばあさんが木の枝でお尻をたたきながら、「ここでおしっこをしてはいけなく」とも言っていたのであろう、大声で怒鳴りつけながら怖い顔で叱っている場面を見た。幼児は泣きながら、排尿を済ませると母親の方へ走り寄って行った。中国の田舎には少し前まで日本にもいた「近所のおせっかい叔母さん」がまだ顕在している光景を見て、一人っ子政策が敷かれていても、地域全体で子育てがなされている一コマを垣間見たような気がした。中国における子育てと文化に関する都市と田舎の比較については、次の研究課題としたいという強い思いに駆られた。



写真2 股開きパンツ

表 2 股開きパンツに関するアンケート

現在のお母さんの年齢	歳
お母さんの職業	会社員 ()、パート ()、教員 () 主婦、その他 ()
排泄指導に携わった主な人	母親、祖母、お手伝いさん、保育園の先生、幼稚園の先生、その他 ()
現在のお子さんの年齢	歳 月
お子さんの性別	男 女
股開きパンツの使用期間	歳 月～ 歳 月まで
小便の自立	歳 月頃
大便の自立	歳 月頃
股開きパンツの利点 (賛成意見)：自由記述	
股開きパンツの問題点 (反対意見)：自由記述	

表 3 股開きパンツに関するアンケート結果

現在のお母さんの年齢	現在 33 歳 出産年齢 26 歳
お母さんの職業	会社員 (22 名)、パート (なし)、教員 (1 名)、主婦 (2 名)、その他 (なし)
排泄指導に携わった主な人	母親 (10 名)、祖母 (10 名)、お手伝いさん (2 名)、幼稚園の先生 (3 名)
現在のお子さんの年齢	全体 5 歳 0 月 男児 3 歳 6 月 女児 6 歳 6 月
お子さんの性別	男児 13 名 女児 12 名
股開きパンツの使用期間	男児 0 歳 0 月～1 歳 7 月まで 女児 0 歳 0 月～1 歳 11 月まで
小便の自立	男児 1 歳 4 月頃 女児 1 歳 7 月頃
大便の自立	男児 2 歳 5 月頃 女児 2 歳 5 月頃
股開きパンツの利点 (賛成意見)：自由記述	排泄をさせる時便利。おまるに座り易い。パンツの脱ぎ履きをさせなくても済む。排泄の自立前でもパンツを濡らさずに済む。お尻が蒸れなくて気持ちよい。排泄の時股を開き易い。排泄訓練し易い。排泄の自立に有利。中国の紙おむつはまだ質が悪く良く蒸れて値段も高いが、股開きパンツは蒸れないし経済的。冬はズボンを脱ぐ時風が入って返ってゾクッとするが、このパンツは脱がなくてもいいので寒くない。“気”がこもらないので体に良い。
股開きパンツの問題点 (反対意見)：自由記述	外で転んだ時、お尻が汚くなる。冬は寒い。所かまわずしゃがんで排泄するので不衛生。マナー習得の妨げになる。ばい菌がお尻から入り易い。見た目が悪い。長い間使用すると自立に不利。

年齢は平均値

早期からの排泄指導と股開きパンツの御蔭であろうか、中国の子どもの多くは 1 歳半くらいで排泄が自立している。その実態に迫るため、今回は成都市中心部に住んでいる母親たちに股開きパンツに関する簡単なアンケート (表 2) を取ってみた。表 3 はその結果である^{註 4)}。

対象は、中国四川省成都市に住む主婦 25 名 (会社員 22 名、教員 1 名、主婦 2 名) で、出産平均年齢は 26 歳であった。股開きパンツ使用開始平均月齢は全員が 0 歳代からで、おしっこの自立が完成した後 (男児 19 ヶ月、女児 23 ヶ月) まで使用している。おしっこが自立した後はパンツに

切り替えられる。今回のアンケートの対象は 25 名と少数であり成都市に限定されていたが、おしっこの自立は男児 16 ヶ月、女児 19 ヶ月、排便については男児女児とも 29 ヶ月という結果を得た。この調査結果からも、中国の子どもは排泄自立の時期が早いということがいえる。

わが国においては、Y 社が実施した調査 (2003)¹³⁾ によると、おむつから卒業する月齢はだんだん遅くなってきているという。800 人を対象にした調査ではおむつがとれた月齢は、2000 年は 30.5 ヶ月であったが、2003 年は 32.8 ヶ月になっていた。また排泄訓練を開始した月齢は、554 名の母親を対象とした調査において、28~30 ヶ月が 125 名、19~21 ヶ月が 102 名と多く、1 歳までに開始した人はわずか 19 名であったと報告されている。

中国では、乳児期から定時排泄の訓練が開始されており、排泄指導に費やされる時間は日本に比べはるかに長い。しかも失敗しても決して叱らないというのであるから、中国の母親は辛抱強いといえよう。しかし最近では欧米の影響や社会の変化を受けて、都市における排泄指導は日本や欧米に近いやり方、すなわち、排泄機能が整ってきた段階で無理なく進めるという方法に移行してきているとも聞いている。

さて、股開きパンツに関する自由記述は以下の通りであった。賛成意見は、

- ① 排泄の自立前でもパンツをぬらさずに済む
- ② パンツの脱ぎ履きをさせなくて済む
- ③ お尻が蒸れなくて気持ちが良い
- ④ 紙おむつは高価な上、使い捨てであるが、このパンツは何回も使え経済的
- ⑤ すぐにオマルに座らせられるので、排泄訓練しやすい
- ⑥ “気” が体の中にこもらないため体に良いなどであった。

一方反対意見は

- ① 所かまわずしゃがんで排泄するので、マナー習得の妨げになる
 - ② ばい菌がお尻から入りやすい
 - ③ 見た目が良くない
- などであった。

以上を総括してみると、圧倒的に賛成意見の方

が多かった。また股開きパンツに対する反対意見は持ちながらも、ほとんどの家庭で股開きパンツを使用しているという実態が明らかになった。その一つの理由として、「“気” が体の中にこもらないため体に良い」という意見に代表されるように、伝統的な排泄指導法がまだまだ受け継がれているという点と、紙おむつは高価でまだ一般家庭にまで充分普及していないという点が背景に浮かび上がってきた。“気” とは形がなく働きだけがあるものとされ、生命エネルギーの源であり、生命を充実した状態に保つ因子である。“気” は通常上から下、また中心から末梢へ流れるのが正常な状態である。¹⁴⁾ その“気” の概念によると、パンツで肛門をふさいでしまうと体の中に毒物がこもって病気になってしまうという。高度成長期の真ただ中にある中国において、こうした伝統的な考え方による子育てがいつまで続くであろうか。中国の都市部の母親たちは科学的な根拠を重視した育児法をどんどん取り入れており、古い育児方を曲げない祖母と、子育てについて意見が対立しているという意見も今回の調査から得ている。中国の育児方にも大きな変化が起きてきているといえよう。従って数年もすると、紙おむつが当たり前という時代になるのではないか。ちょうど日本の昭和 50 年代後半から 60 年にかけてのように。子育てはその背後の社会を反映しているといえる。

IV 排泄指導の日中比較 — 障害児について

1. 日本での障害児に対する排泄指導

基本的には、健常児に対する指導となら変わりは無い。ただ、こだわりがあったり、繰り返しが必要であったりするため、習慣形成されるまでに時間がかかるというだけの違いである。従って排泄が自立する時期は健常児より遅い。我々の臨床経験からは一般的に、自閉症児についてはおしっこの自立はおおよそ 3~4 歳、大便の自立は 4~5 歳というデータを得ている。

大友ら (1980)¹⁵⁾ は R. M. foxx & N. H. Azrin のオペラント原理に基づいた 3~4 日間の集中訓練プログラムを障害児に適用した研究報告をしているが、こうした特別な集中訓練を用いているところは少なく、多くの施設においては健常児への指導と同じように「あせらず、あわてず、あきら

めず」を基本にした指導を実施している。排泄自立に力を入れ過ぎて、母子関係がこじれたり、こだわりをさらに強化してしまったという事例も少なくないからである。

自閉症児はトイレへのこだわりや特定のものへの恐れが原因で、自宅以外のトイレでは絶対にしないと、トイレ以外の場所（お風呂場など）でするなど、特有の問題を抱えている場合もある。また重度の知的障害児の中には、感覚遊びの延長で自分の排泄物をこねたり、においをかいだりする子もいる。しかし、排泄指導の原則は「あせらず、あわてず、あきらめず」であり、かつ生活リズムを整えることからスタートさせる。そして、いきなり便器に座らせるのではなく、排泄する場所に慣らさせ、時間になったらトイレに誘うという時間設定型指導を繰り返す。これと平行して、排泄行為のモデルを示したり、排泄後の手洗い指導も行っていく。そしてタイミングよく便器に排泄できた時は大げさに褒めて、ご褒美シールなど、成功したことを視覚的に確認できるような工夫も大切である。定時排泄で失敗がなくなってきたら、「おしっこへ行こう」という声掛けの回数を徐々に減らし、自己決定型へ移行していく。そして最終的には終日自己決定型にする。原則は健常児への排泄指導の段階をスモールステップにわけ、無理せず一つずつ階段を上っていくように進めていけばよい。また失敗が続く場合でも焦らず、前段階に戻ってもう一度そこからやり直していけばよいのである。

排泄の自立は社会参加にとって大切な課題であるので、幼児期から「あせらず、あわてず、あきらめず」の3原則を大切にしながら自立に向かわせたい。また排泄指導はおしっここと大便の問題だけに焦点を当てるのではなく、食事や運動、知的理解や対人関係面など、総合的な視点からの援助・指導が必要とされている。

2. 中国四川省成都市における障害児に対する排泄指導の実際

筆者は今回、四川省で唯一の特殊教育センター（聖愛特殊教育センター^{註5)}以下「センター」と記す）を訪問する機会を得た。

本センターでは10年間で140名の障害児が教

育を受けてきている。障害別にみると、知的障害40名（28%）、自閉症26名（19%）、重複障害74名（53%）で、現在は児童数66名で、職員23名で構成されている。センター長はじめ、全職員が情熱を持って指導・教育に取り組んでおり、教員に対する教育・トレーニングにも力が注がれていた。子どもたちに対する指導の基本は、一人ひとりを大切にするこゝろで、個の発達レベルを保護者と一緒に確認し、それに基づいて個別プログラムが作成されていた。決して押し付けの教育ではなく、無理せずスモールステップで指導が進められていた。この点は日本の障害児施設での取り組みと同様であり、障害児教育の基本をふまえているといえる。

排泄指導においても、同様の姿勢で取り組まれていたが、大きな問題点が2点浮かび上がってきた。1つ目は、入学以前に家庭で排泄指導が少しでも試みられている子どもは皆無であるという点。学童期に入学してくる子であっても、それまで家庭では一切指導がなされてきていない。従ってセンターに入学してきて始めて排泄指導が開始されるのである。しかし年齢が高い子どもほど、パンツの中でしてしまうという習慣が長く形成されてきているため、トイレで排泄する習慣を身に着けるまでには随分時間がかかる。お漏らしがすっかり習慣化されている状態で入学してくるという点は大きな問題点といえる。

そして2点目は、いくらセンターで熱心に排泄指導していても、帰宅後家庭では排泄指導は殆どされていないという点である。センターで過ごす時間より、家庭での時間のほうが長いのであるから、家庭とセンターとが車の両輪になって同じ姿勢で排泄指導していかなければ、習慣形成は不可能である。しかし実際には親たちは、センターに通わせるだけで精一杯、あるいはセンターに任せっぱなしのようである。

センターでの排泄指導は日本の障害児に対する指導と基本的には同じであったが、以上の2点の他に、設備が整っていないという点も大きな問題といえよう。写真3、4はセンターで使用されている障害児用オマル、写真5はトイレである。写真6の一般家庭で用いられている色鮮やかなかわいいうオマルと比べると、衛生面においても心理面

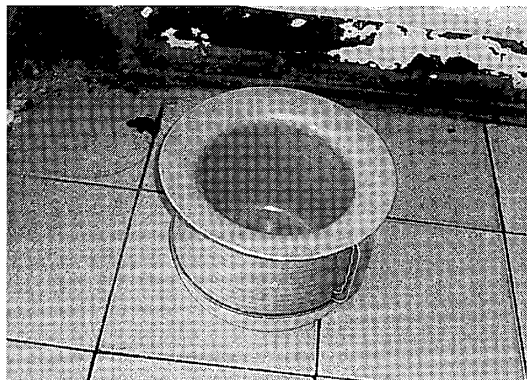


写真 3 障害児用オマル



写真 4 障害児用オマル

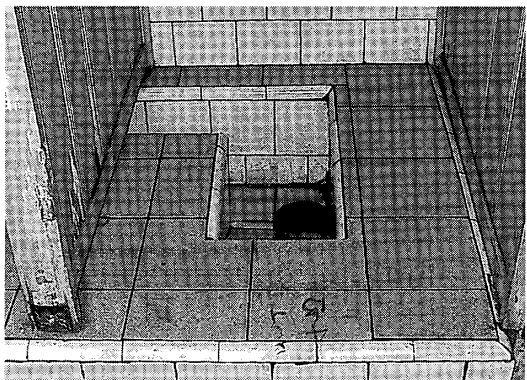


写真 5 障害児用トイレ

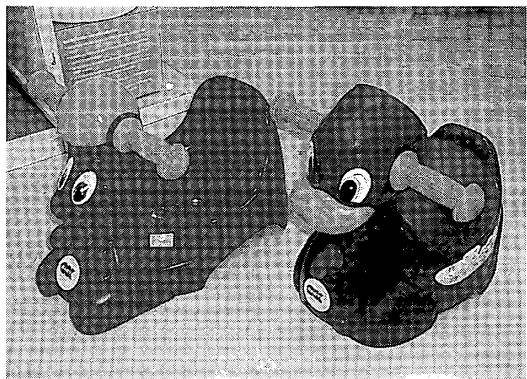


写真 6 一般家庭用のオマル

においてもとても行き届いているとはいいがたい。トイレには扉もなく、汲み取り式である。センターに限らず、中国のトイレ事情は全般的に遅れており、公衆便所には扉がない所も多いが、ここではトイレ指導しやすいように、あえて扉は設置していないとの事であった。また、トイレトーパーは流すと詰まってしまう為、ゴミ箱へ入れるようになっている。水洗トイレが当たり前の我々にとっては不衛生に感じられるが、それが中国では通常である。従ってセンターにおいても、ペーパーはトイレに設置されておらず、大便の時はペーパーを持って入り、簡単にふき取るという指導がなされていた。

以上が中国の障害児に対する排泄指導の実際である。職員の熱意は十分感じられたが、問題点が山積みであるというのが現状であった。

V 終わりに

筆者は幸運にも中国文化や障害児教育に触れる機会を得ることが出来た。近代化が猛スピードで進んでいる中国においては、形だけを取り入れ、試行錯誤で模索中ともいえる子育て、障害児教育の一面を見た。今回はその第一報として排泄指導を取り上げ我が国との比較を試みたが、とくに障害児に対する指導においては問題点が山積みであり、十分行き届いていないという現状があった。指導としては排泄を含めた ADL の自立より、文字や言葉の知的面での指導や、職業技術の知識を学ぶことが重視されている。この点はセンターにおける教育・指導の問題にとどまらず、中国全土における障害児教育の問題といえよう。

中国の障害児教育はこれからどのように展開されていくのか、またその背景にある一人っ子政策、老人の生活様式の変化、都市と農村部の格差の問題など探っていくと大変奥が深い。今後はこうした点に関する研究を進めていきたい。

【注】

- 1) 福利児童院：中度重度の障害児はここで孤児と一緒に収容されていた。
- 2) 中国四川省成都市：四川省は中国南西部に位置し、面積は 48 万 8 千 km²、人口は 8493 万人。成都市は四川省の省都で、四川盆地の成

都平野に位置している。面積は 12390km²、人口は 1240 万人である。成都市の歴史は約 3000 年前に始まった。現在は中国西南地区の科学技術、商業貿易、金融の中心地であると同時に交通、通信の中核で、全国 20 大都市のひとつである（我愛成都、2001 より）。海外から多くの企業が進出してきている。一般的に夫婦は共稼ぎをしており、子どもは祖父母か「保姆（バオムー）」とか「阿姨（アーイー）」と呼ばれるお手伝いさんに預けたり、早くから幼稚園に入園させたりしている。

- 3) 通訳の廖冬梅さんの力を借りながら、訳したものである。
- 4) 中国文化は都市部と農村部では大きな違いがあるとともに、都市部でも、沿岸部と内陸部とではまた少し違いがある。本調査は四川省成都市の一部の母親を対象にしたものであって、中国全土についての結果ではないことを断っておく。
- 5) 聖愛特殊教育センター：中国成都市にある私立の特殊教育センターである。外国の団体から資金援助を受けてを運営している。就学前児に対しては、就学に向けての指導を、また小学校に就学できなかった子どもたちに対してはきめ細かい個別指導を行っている。障害別には、知的障害（28%）、自閉症（19%）、重複障害（53%）で、10 年間で計 140 名子どもたちが卒園している。現在児童数は 66 名、職員 23 名で教育に当たっている。職員に対する教育・トレーニングにも力が注がれている。

【引用文献】

- 1) 人民中国、2003『高齢化社会を迎えて』9-10
- 2) 溝上愷、1987『中国の教育』権藤興志夫（編著）『アジアの文化と教育』九州大学出版会、104
- 3) 真殿仁美、2003『中国障害児教育の改革』日本現代中国学会全国大会資料
- 4) 真殿仁美、2003『中国における障害児教育形態の改革』障害者問題研究、31（3）70-81
- 5) 赤司俊二、1986『ママ、おねしょが治ったよ！』主婦の友社、17-64
- 6) 帆足英二、1987『ママ、おしっこといえるまで』プチタンファンブックス
- 7) 内藤寿七郎、1985『赤ちゃん百科「改訂版」』保健同人社
- 8) 大友昇、1997『ほめて子育てトイレット・トレーニング』川島書店
- 9) 島田憲次・東田章・松本富美、2004『遺尿症（夜尿症）の治療的トイレット・トレーニング法と進め方』小児看護、27（2）161-165
- 10) 陳生編著、1999『新編育児百科』科学出版社
- 11) 恒吉僚子・S. ブーコック、1997『育児の国際比較 — 子どもと社会と親たち』日本放送出版協会、35
- 12) 同上書 47
- 13) ユニ・チャームと花王による調査から（2004年9月27日朝日新聞）
- 14) 福澤素子、2004『漢方を支える概念』現代のエスプリ、77
- 15) 大友昇・東正・藤田継道・松原隆三、1980『精神発達遅滞児の排泄訓練に関する研究 2』国立特殊教育総合研究所紀要、7、55-64

【参考文献】

- 芦沢礼子、2001『我愛成都』高文研
- 井ヶ田良治・田端泰子・布川清司編、1996『家と教育』早稲田大学出版部
- 石原邦雄、2003『現代中国家族の変容と適応戦略』ナカニシヤ出版
- 石原潤、2003『内陸中国の変貌』ナカニシヤ出版
- N. H. Azrin, and R. M. Foxx (1971): A rapid method of toilet training the institutionalized retarded. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 89-99
- N. アズリン・R. フォックス、1984『一日でおむつがはずせる』主婦の友社
- 落合恵美子、2003『アジアの共働き社会における子育てを支えるもの — 中国・タイ・シンガポールの場合』現代のエスプリ、429、『仕事と家庭の両立』93-107
- 高橋悦二郎、1985『月例別赤ちゃんの育て方』小学館
- 高橋悦二郎、1986『よい子をはぐくむ育児として』

け』講談社

善積京子、2000『結婚とパートナー関係 ― 問い
直される夫婦』ミネルヴァ書房

The Facts of Toilet Training to Children with and without Developmental Disabilities in China

— Comparison with Chengdu Sichuan China and Japan —

Ogiwara, Harumi*

広大な面積を占める中国。その中国では絶え間ない社会の発展の中で子育て方法も大きく変化してきている。筆者は今回中国文化や障害児教育に触れる機会を得た。中国に足を踏み入れ、真っ先に筆者の目を奪ったのが「股開きパンツ」を履いた幼児の姿であった。中国独特のこの「股開きパンツ」から排泄指導についての関心が高まり、今回は日中比較を試みた。

四川省成都市の代表的な育児書を取り上げ、排泄指導の項目を丁寧に読みすすめたところ、超早期から排泄指導が開始されていることが明らかとなった。我が国では排泄指導開始月齢は28ヶ月～30ヶ月、または19ヶ月～21ヶ月が最も多いのに比べ、中国では0歳代から開始している。また「股開きパンツ」の影響もあってか排泄自立年齢も日本より早い。

一方、障害児に対する排泄指導については、職員の熱意は十分感じられたが、問題点が山積みであり、十分行き届いていないという現状があった。中国においては排泄指導を含めたADLの自立より、文字や言葉の知的面での指導や、職業技術の知識を学ぶことが重視されている。この点は、センターにおける教育・指導の問題にとどまらず、中国全土における障害児教育の問題といえる。

キーワード：排泄指導 (*toilet training*), 健常児 (*children without disabilities*),
障害児 (*children with disabilities*), 育児書 (*child-care manual*), 中国四川省成都市 (*Chengdu, Sichuan, P. R. China*)